

第7章 おわりに

本章では3年計画となる地域活性化に関わる熟議プロジェクトの1年目について、地域の活性化に結び付けるための熟慮と議論の成果を振り返り、2年目に向けての課題の整理を行うとともに、熟議手法についての成果と定着に向けての反省を行う。

1. 地域活性化に向けての成果

最初に参加者の「熟慮」、「議論」の成果はどのようなものであるのかを示す。第3章の熟慮の成果をみると、参加者の理想とする地域は、年代による差は小さく、共通して、自然と利便性が共存し、豊かなコミュニケーションがあって、住みやすい地域、ということになる。成熟した社会における、安定的な地域像である。

それを踏まえ加古川地域を眺めた場合、地理構造の理由や集積の経緯から、当該地域は豊かな自然と利便性、経済的な活力とを共に備え、さらに地域内には比較的密接な人間関係が存する。それ故にこれらに関わる要素を「強み」として多くの人が認識をしている。

一方で、安定を崩すかもしれない犯罪や事故を「弱み」と挙げ、安定して、変化を嫌う地域性から将来への不安があり、またそのため他者の受入れに対する抵抗があることからの人間関係の課題もあって、それらが「弱み」と感じられるのである。つまり、当該地域には概ね満足するが、反面それへの危機感、または不安もあるといえる。

こうした熟慮をもって、議論に臨むことになったが、第4章で示すように、前述のことについて、多くの人が共通して認識をしていることを確認するのが議論の最初となっている。例えば、地域内の人間関係や交通の利便性など、参加者の立場や日常生活の違いにより意見が分かれるのは、議論の進行に変化を与え、その背景を認識する機会となったようである。こうした認識の摺合せ、あるいは見方や立場の違いからの認識の相違を確認することも、1年目の熟議では欠くことのできぬ成果と言える。

その後、主に何を議論のテーマとするかにより、後半では2つの流れがあったようである。それは、誰を対象に活動をするのか、という点である。

第一には、地域の中の人、つまり住民の満足度を高めるための方向性である。これは「強み」をより強化する方向として提示されているものである。加古川地域の良さを住民で共有し、それを知り、思いを一つにするということである。イベントの開催や若者への地域に関する教育の充実、交流の強化によって地域の協力をより進めること、などの提案がなされている。

第二には、地域外の人に対して情報を発信することである。知名度の低さも「弱み」であり、これを

改善することになる他、発信によって外部からの人口の流入を促すことが可能になれば、この地域の「弱み」となっている変化を嫌う地域性から生じる将来への不安を少しでも和らげることができると考えたのではないか。つまり、「強み」を活かし、「弱み」を和らげる議論の中で、加古川地域の内と外へのアプローチが議論されたのである。もちろん単純に二分されたということではなく、またどちらを優先すべきとの議論でもない。互いに関連をもつての議論であり、第4章でのまとめにあるように、「住んでいる人たちがより良いと思う町に変えながら、外に適切に情報を発信し、新たに住人を受け入れる」という外と内との“循環型”の関係に至る議論ともいえる。

2. 熟議手法の定着に係る成果

次に、熟議手法の定着について示す。

「熟議」という語の知名度が昨年度の3割から4割へと上昇していることは、第5章でも触れたとおりであり、継続することにより定着を図ることが期待される。熟議手法への理解は8割を越えており、高い理解がその背景にある。

本学の「熟議」手法の特徴でもある、熟慮と議論との段階を設けることの意味を考える上で、議論の前後での、議論に対する期待と成果の比較は参考になる。そこでは、参加者にとって議論の段階が受け身ではなく積極的な情報発信や交流にあるとの認識があったのである。とはいえ、アンケートでは熟慮の段階は意見の表出よりも聞くためと考えている人の多いことも示しており、熟慮の段階が持つ意味をより明確にしなければならないであろう。

熟議手法の定着を目指すことの一理由の一つには、民主主義における補完機能としての熟議、あるいは多様な担い手による共助の拡大の中での意見の集約というローカルガバナンスへの応用を期待するものがある。アンケートからは行政施策の方向を決める際への活用に対する期待が大きい反面、意見集約の手法としての役割にはまだ工夫の必要ありと読みとれる。これは議論の段階の条件の問題、つまり時間の長さもある他、意見集約のためのファシリテーション技術の問題もあると思われる。短い時間の議論の段階で意見集約に向けて急いだり、一定の結論に至らなかった場面も多かったのである。これらの解消方法も課題であり、ファシリテーターの育成の他、議論の段階を繰り返すなどの方法もあるのではないだろうか。

さて、兵庫大学の熟議では、学生がファシリテーションを行い、高校生も参加する。そのため若年参加者の成長を即すことも熟議の目的となる。

若年者の成長については10の指標で計測をしており、その成果を第6章に基づき明らかにする。最初の注目点としては、熟議の経験を経て、学生の場合は思考力が最も上昇しており、次いで交渉力が伸びているのに対し、高校生の場合は貢献性と交渉力、規律性が上昇している。若年者といっても高校生、大学生で特性が異なっている。特に、高校生における特徴は、若年のうちから地域のことなどに真剣に

取り組むことにより、社会への関与を促進する効果があることを示しており、シティズンシップ教育の重要性を示唆する。一方大学生の場合、ファシリテーターとなった学生と、参加者として意見を述べ議論した学生との間で、自己評価にも違いがみられる。ファシリテーターの役割と意味を学生がより理解するための訓練にも工夫が必要である。さらに、学生では経験を積むほど、自己評価が高まることが明らかとなっており、参加を続けることによる自己肯定感の高まりを示すものといえる。

このように若年者に対する教育への効果は大きいものであり、継続により、さらにその価値が高まること、高校生の参加が今後の地域や社会の変革に不可欠であることを示す。

3. 「熟議 2014 in 兵庫大学」に向けて

3年継続の2年目は、テーマを絞り、その解決策を見出すことが求められる。テーマについては、加古川地域の「強み」を強化するために、①若年層を中心とした地域住民に対する教育や啓発活動、②世代を超えての交流とコミュニケーションの活性化、といった点がテーマとなるであろう。教育の問題、コミュニケーションの問題は地域への参加、コミットのあり方でもある。

次に「弱み」を改善するためには、①加古川地域の PR、②外からの人材の定着、などが課題になると思われる。外への発信ということに留まらず、地域の変革に必要な人材の活かし方やその仕組みなどを模索する必要がある。人口の減少が食い止められない以上、その価値を最大に発揮することが地域間競争の主要なテーマになる。

ところで、議論の俎上にはほとんど上らなかったものの、熟慮の段階で指摘され、課題と思われる犯罪の発生率の高さや交通事故が多いことなど安心・安全に係るテーマは熟議により合意形成を行う適切なテーマとも思われ、次年度で取り上げることの重要性を指摘しておく。

テーマとともに、熟議手法の定着に向けては、ファシリテーターとなる人材の育成に定期的に努めることや、熟慮の段階が議論にどのように位置づけられるのかを明確に示すことなどプロセスの見直しや啓発にも力を入れたい。なにより、継続が重要であることから、今年度の参加者が、「熟議 2014 in 兵庫大学」にも参加頂ける環境作りも必要になるであろう。

当該報告書がその一助となり、これを読んだ参加者が、再度兵庫大学での熟議に参加されることを強く願うとともに、地域の活性化に関心ある方々がこれに関わる機会を今後も作っていくことを約束し、まとめとしたい。

(田端和彦)

